

2025 年 欧州病理学会参加報告

愛知医科大学病院病理診断科

高原大志

この度、オーストリア、ウィーンにて開催された第 37 回欧州病理学会（2025 年 9 月 6-10 日）に派遣して頂き、日本病理学会との joint session で発表させて頂きましたので、報告をいたします。

今回の発表のお話をいただいたのは、2 月か 3 月ごろだったと記憶しております。空間トランスクリプトーム解析を題材として、30 分発表させていただけるとのこと、大変光栄なことではありましたが、正直なところ発表までにデータをまとめることができるかという点が大変不安でありました。わたくしの発表は前立腺導管内癌を対象とした空間トランスクリプトーム解析と、前立腺癌の間質を対象としたより解像度の高い解析の二本立てで行う予定でした。前者は解析が終了してすでに論文を投稿していたのですが、後者はその時点においてまだシークエンスの結果が終わっていないという状況でありました。そのような状況でありながら、何とか形をまとめて発表を終えることができ、現在では大変安堵しております。

私が発表させていただいたセッションでは、日本から中山敦仁先生（東京大学）、ドイツから Dr. Denis Schapiro（ハイデルベルク大学）が発表されていました。中山先生は我々とは異なるプラットフォームを用いて胃癌を対象に解析されており、比較的私のような、外科病理医にもなじみのあるテーマで、大変興味深く拝聴いたしました。発表後に伺ったところ、我々がデータ解析の多くを受託解析に依頼しているのに対し、中山先生はデータ解析もご自身のラボで完結されてらっしゃるとのこと、深い感銘を受けました。Dr. Denis Schapiro の発表は解析のパイプラインそのものに関する発表でありまして、正直なところ私には難解でしたが、空間オミックスデータをいかに統合し、臨床に還元していくかという先進的な取り組みであり、扱われているであろうデータの膨大さと複雑さに圧倒されました。

また、発表会場には Prof. Geert J.L.H. van Leenders（エラスムス大学医療センター）もお越しになっており、驚いたことに私の導管内癌の論文を査読されていたとのことでした。発表後の質問で導管内癌と High-grade PIN の関係について質問されたと記憶していますが、的確に答えられたか自信がありません。また発表後は、小田義直先生、都築豊徳先生、山元英崇先生、岩崎健先生、中山敦仁先生とご一緒にウィーン名物のウィンナーシュニッツェルなどをいただき、大変楽しい時間を過ごさせていただきました。

その他の演題に関しては、人工知能に関連する発表が非常に多く、時代の潮流を感じさせられるところがありました。

最後に、このような貴重な機会を与えていただきました日本病理学会ならびにヨーロッパ病理学会の関係の方々、また派遣に際して多大なご支援をいただきました菊川敦子様から御礼申し上げたいと思います。

左から、高原の発表の様子、ウィンナーシュニッツェル、ザッハトルテ

